

何かを始めるのに遅いということはない

ブレインワークス

伊能忠敬は日本で初めての、きわめて正確な日本地図として有名な「大日本沿海輿地全図」を完成させた人物である。下総の商人であった忠敬は50歳のとき、家督を息子に譲り、江戸に出た。そして、測量を学び、実地測量のための全国行脚に旅立つ。当時56歳の時だったという。今でいうと65歳か70歳くらいの感覚か。よほど思い切った決断である。彼にも思うところがあったのだろう。家族、親戚の反対もあったかもしれない。しかし、『人生50年』という言葉もあるように、迫り来る人生の終焉の前に、いてもたってもいられない焦燥感があったのかもしれない。

『このままでは終われない』その衝動が彼の背中を押したのではないか。74歳で亡くなるまで、10度の測量の旅に出かけ、死後も喪を秘して地図製作の作業が進められたという。忠敬としても、心願

成就の人生だったに違いない。

さて、今の日本で、この伊能忠敬のような人生を送ることはできるだろうか？それは、なかなか難しい。それを許す社会環境でもない。特にビジネスの世界では。個人の問題というよりも、国自体が成熟してしまっているせいか、何をするにも、重箱の隅をつつくビジネスばかりになってしまう。小難しいことを考えて、いろいろと頭をひねらすことも大切であろう。しかし、商売はもっとシンプルにいきたい。無いものを作り、欲しい人に売る。このビジネスの形が、まだまだ通用する世界もある。それが、成長著しいアジア新興国だ。

アジア各国を巡っていると元気なシニアが多い。長い歳月を刺激の多い国で過ごしているのもあるのだろうが、人生を、仕事を楽しんでおられる。例えば、アジアのある都市で飲食店を始めるシニアも多い。

日本のおいしい料理をアジアでも…とても単純明瞭な発想だ。でも、これが商売の原点に違いない。翻って日本はどうか？ どこか元気のないシニアの方々が数多く目に飛び込んでくるのが残念で仕方がない。元気なはずのシニアの方々が、複雑化した社会に疲弊しているようにも見える。



「もっと簡単に単純な思考で物事を考えられないのか？」。日本のシニアの方々も、我が国の実情を見て、こう感じずにはいられないのではないだろうか。

アジアは前述のとおり、まだまだシンプルな商売ができる国が多い。これから、商売の醍醐味を感じることでできる時期に差し掛かる。現地に立てば、40年、50年前に日本を経済大国に押し上げ

たあの経験と感覚がよみがえってくるだろう。シニアの方々の出番はいくらでもある。アジア各国も、そんなシニアの方々の経験とノウハウに学びたいと思っている。しかし、そのラブコールは、日本にはなかなか届かない…。あえて、シニアの方々にお伝えしたい。何かを始めるのに遅いということはない。このことは冒頭の伊能忠敬も教えてくれている。

近藤 昇（こんどう・のぼる） 1962年徳島県生まれ。ブレインワークスグループCEO。神戸大学工学部建築学科卒業。一級建築士、特種情報処理技術者の資格を有する。現在は日本、アジアをとびまわり、ベトナムだけにとどまらずカンボジア、インドネシア、シンガポールなどやメコン・アセアン全域において、経営者向けセミナー活動を通じて、経営課題の解決支援を行うとともに、メイドインジャパンの商品だけでなく、日本の技術、ノウハウ、品質、工程管理などあらゆる日本ブランド「JAPAN STYLE」ビジネスの創発・拡大を行っている。

